新・山と花のたより 236号

２０２０年４月１５日　　松尾　忠
メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp
ＨＰhttp://yama-to-hana-no-tayori.sakuraweb.com/

「3密」を避けて葛城山へ

私にとって最良のコロナ禍対策

新コロナウイルスが世界を席巻している。東京・大阪・兵庫などを対象に「緊急事態宣言」が出され、奈良県でも感染が報告されるなど、コロナ禍が身近に迫ってきた感じだが、個人では「３密」(密閉・密集・密接)回避の努力をするしかないようだ。と言っても高齢者にとって日常の運動は欠かせない。これらのことを考えれば、山歩きは一挙両得の良策と思われる。

↑カタクリ（ユリ科カタクリ属）

↑ミヤマキケマン（ケシ科キケマン属）

早春の花咲く登山口

４月８日、バイクで葛城山登山に出掛けた。路傍を彩るサクラや菜の花、レンギョウ、クサフジなどを横目に見つつ、７時３０分御所市の葛城ロープウェイ登山口駅前に到着。準備を整え、7:45 登山開始。曹洞宗・不動禅寺の桜を見つつ、いのしし用柵をくぐって登山路に。クサノオウ、スミレ、ムラサキケマンの花々が迎えてくれる。

北尾根コースを登る

すぐに分岐があり、まっすぐ行けば「クジラの滝コース」だが、右側の急登をロープにすがって北尾根コースに取りつく。両膝にきっちりとサポーターを巻いた脚では段差の大きい登りは歩きにくく、きつい。息が上がりがちだが、谷間に響くウグイスやイカルの囀りに励まされる。

↑ショウジョウバカマ

生き物たちに力をもらいつつ

やがて、道はＶ字状にえぐられた溝の底を歩くようになり、足元は滑りやすい。ふと見上げると崩れた斜面の縁にシュンランが点々と花を咲かせている。凛とした花の佇まいに見惚れ、沢山の蕾をぶら下げたアケビの下を通ってさらに登る。

途中のベンチで休憩。眼下に御所市南部の村々と田畑が広がり、遠くに吉野の山々が春霞にぼやけている。「チョット来い、チョット来い」とコジュケイの鳴き声が聞こえる。「ポッーポッー」と鳴いているのはツツドリではないか、いやツツドリにしては季節が早すぎるのだが。

↓ヤマルリソウ（ムラサキ科ルリソウ属）

１０数回もギフチョウと出会う

さらに登り、明るい落葉樹林の横を歩く。突然、足元から蝶が飛び立った。ギフチョウだ。まるで道案内するかのように、飛んでは停まり、近づくと舞い上がる。私ののろのろ歩きに合わせてくれているのか、それとも焦れたがっているのか。可愛い蝶たちに遊んでもらいながら進む、道端にカタクリが見え始めるが、まだほとんどが蕾、ギフチョウはスミレなど他の花の蜜を吸っているのだろう。

↑ギフチョウ

カタクリもショウジョウバカマもまだまだ

9:55 ダイヤモンドトレール(略称ダイトレ、二上山～葛城山～金剛山をたどる縦走路)と合流。すぐに自然研究路に下る。斜面を横切って緩やかな散策路が続いている。カタクリが沢山葉を広げており、ポツリ、ポツリと花が見えるが、開花はまだまだ。見頃には１０日ほどが必要か。別の道からダイトレに戻り、キャンプ場から青崩(あおげ)ルートを少し下ってショウジョウバカマの群落地に。ここでも開花しているのはまばら。

櫛羅(くじら)の滝コースで下山

カタクリもショウジョウバカマも多くの蕾を確認できたので、次を楽しみにして、11:55 下山開始。櫛羅の滝コースでミツバツツジ、ウグイスカグラ、ヤマルリソウ、スズシロソウ、ミヤマキケマン、ヤマブキなどを楽しみながら 13:20 登山口帰着。

←ウグイスカグラ（スイカズラ科スイカズラ属）
写真は　故澤木仁さん（二上山で）

大切にしたいギフチョウ

ギフチョウ(アゲハチョウ科ウスバアゲハ亜科ギフチョウ属)は日本だけに生息し、その形態に祖先的な形質を残していると言われる貴重な生物です。早春に羽化して、交尾・産卵し、幼虫はミヤコアオイなどの葉を食べて育ち、サナギで越冬して翌春出現するのです。

御所市の条例で保護されている

近年その数が激減し、絶滅危惧種となっています。御所市でも天然記念物として保護条例が制定され、大切に保護されています。隣接する大阪府の河南町や千早赤阪村も保護活動に乗り出し、金剛山～葛城山系の全域で、成虫、幼虫、卵、そして食草のミヤコアオイの採集は禁止されています。

日本の春の象徴とも言うべき「可愛い花たちとギフチョウ」をみんなで大切に守りましょう。

←ギフチョウ幼虫の餌になるミヤコアオイ（下部中央が花）